

【背景】喫煙は、肺ガンなどの呼吸器系の疾患や、糖尿病や冠動脈疾患などの全身に対する影響も大きいとされているが、歯周病のような口腔疾患のリスク因子でもあることが知られている。このため、口腔保健に関わるものにとっては、喫煙に対して厳格な姿勢を有することが期待されるようになってきている。

【目的】口腔保健に関わる歯科衛生士学校学生の喫煙の実態を調べるとともに、若年者の喫煙習慣形成の背景因子を探り、有効な防止策を施すための情報を探索する。さらに、口腔保健従事者となる者に喫煙が口腔の健康に与える影響を考える機会となるような、啓発的な調査を行うことを目的とした。

【方法】福岡県内の歯科衛生士養成学校の学生168名を対象として、平成15年度から平成16年度にかけて、自記式質問票による調査を行った。質問票の内容は、小中校生および専門学校生を対象として喫煙実態調査を行った淡路医師会の調査(2003)および箕輪ら(1992)による青少年の喫煙実態に関する全国調査に準じ、一般属性、喫煙に関する認知、喫煙状況、周囲の喫煙者、防煙教育の経験などとした。質問票は無記名とし、さらに調査に対して同意した者のみを調査対象とすること、同意しないことによる不利益はないことを明記したうえ、回収は留置式として、自由意志により回答を拒否できるように留意した。質問票を回収後、データシートを作成し、喫煙関連の記述統計を算出するとともに、喫煙習慣が確立する際の背景となる因子の推定を行った。今回の調査対象には未成年者が含まれるため、当該校の施設長の許可を得たうえで調査を実施した。なお、今回の研究については、福岡歯科大学・疫学研究倫理審査専門委員会の承認を受けている。

【結果】学生168名に質問票を配布し、164名(97.6%)から回収され、有効回答は158名(有効回答率94.0%)であった。「ときどき」あるいは「毎日吸っている」との回答は32名(20.3%)にみられ、このうち「毎日」かつ「吸い始めて6ヵ月以上」経過している者は26名(16.5%)であった。

喫煙者と非喫煙者には、喫煙が及ぼす健康被害に関する知識には差がなかったが、喫煙者には医療従事者の喫煙に関して「個人の自由」と考えるものの割合が多く、防煙教育の受講機会も少なかった。喫煙習慣の形成には、周囲の人間の喫煙状況が強く関与すると推察され、とくに母親が喫煙者の場合の喫煙のオッズ比は5.1( $p=0.000$ )と、有意に高値を示した。

【考察】患者と接する時間が長く、喫煙の影響を視覚的に把握することのできる歯科診療のセッティングは、禁煙教育の“teachable moment”として有効とされている。このため、歯科衛生士が今後、禁煙教育に積極的に参画していくことが期待されており、歯科衛生士自身が高い喫煙率を有することはこのような流れに逆行することになるものと思われる。今回の歯科衛生士学校での喫煙率は20.3%と、20歳代の一般女性(19.2%、平成15年国民栄養調査)と比しても高値で、早急に対策を要するものとなっている。

【結論】歯科衛生士学生のような若年女性の喫煙習慣の形成には周囲の喫煙状況、とくに母親の喫煙習慣が大きく関与する可能性が高く、対象者の家庭までも含めた防煙教育の必要性が示唆された。

(連絡先) 内藤 徹

naito@college.fdcnet.ac.jp